学生ボランティア制度の現状と諸問題
—「広島大学国際交流ボランティア」発足から2年半を経て—

金　田　智　子

1．はじめに

日本の大学で学んでいる外国人留学生を支援するには様々な方法がある。問題が生じた時に相談に乗り、共に問題解決に取り組む、経済的な援助を行う、有用な情報を提供する等、多様である。国立大学の留学生センターには留学生指導部門等の名称で留学生指導を主な業務とする教官が配置されている。それぞれの状況に応じて、業務の範囲、方針など指導の在り方は当然異なる。広島大学留学生センターでは、留学生受け入れに関する経験の蓄積を経て、留学生指導の在り方を臨床・相談を中心とした「対処」型の支援活動から、危機管理を念頭においた「予防」型の交流活動へと方針転換をした（玉岡、1999a、1999b）。

その方針を具体化する上で、中心となった活動の一つが「広島大学国際交流ボランティア」の発足であった。本稿では、本制度の1998年6月の発足から現在までの活動の内容を概観し、どのように組織が定着してきたか、その過程でどのような効果と問題点があったのか、今後改善すべき点は何なのかを述べる。

2．「広島大学国際交流ボランティア」とは

「広島大学国際交流ボランティア（以下、「国際交流ボランティア」とする）」制度は、1998年6月、広島大学留学生センター運営委員会の承認を得て発足した。本制度の目的は、留学生に対する支援の充実、日本人学生と留学生との国際交流、日本人学生の国際理解の促進である。活動内容は留学生センター主催または共催の国際交流事業に参加協力すること、国際交流事業などに関する情報を得て、ボランティア活動をすることである。実際の活動内容に関しては後節に譲るが、本制度が求めていたものは、一方的な援助や、留学生と日本人学生の二項対立的な交流ではなく、広島大学に学ぶ学生がこの組織を活用することによって、誰もが様々な交流を通して何かを得ることができることであった。

発足当初、以下のものを主な活動内容として想定していた。

・ボランティアチューター、生活上のオリエンテーション
・会話パートナー
・通訳
・物理数学などのチューター
・コンピューターの指導
・パーティー、ハイキング、スポーツ大会、音楽関係の催し等の企画運営
・日本文化、日本武道の紹介

これ以外に、学生の自主企画も奨励することとした。

また、この組織を運営する委員は留学生センターの教官４名（発足当初は５名）である。そのうち、指導部門の２名が中心となって活動を推進し、うち１名が登録者のデータベースの管理とメーリングリストの管理を担当した。

３.「国際交流ボランティア」の運営

募集から登録、実際の活動、活動の記録に至るまでの流れは以下の通りである。

①募集から登録まで

登録者募集のポスターと登録用紙を作成し、各学部に掲示を依頼する。登録を希望する学生は用紙に必要事項（専攻、学年、希望する活動等）を記入し、留学生センターの担当者に提出する。担当者は登録用紙に記載されている内容を、登録者データベースに入力し、同時にメーリングリスト（以下「ＭＬ」とする）に登録する。

②登録から活動実施まで

ボランティアチューターなどの人員が必要になった時、担当者はMLを通じて登録者全員に対して募集通知を行う。応募者が多い場合は、学年、専攻などを考慮して選考をする。逆に、応募者が必要人数に満たない場合は、登録時のデータをもとにE-mailか電話で直接依頼を行う。

活動をすることになった学生を集め、オリエンテーション等のミーティングを行い、活動を開始してもらう。ボランティアチューターや会話パートナーは一対一の活動となることが多いため、良好な人間関係が保てるよう、オリエンテーションに重点を置いている。また、オリエンテーションで担当者が一堂に会することにより、同様の活動を行う他の登録者と知り合いになることができ、その時点でのあるいはそれ以降のさまざまな情報交換が可能となる。パーティー等の企画運営に関しては、この最初のミーティングがすでに活動の開始となり、担当教官は第一回のミーティング以降はオブザーバー的な役割に転じる。

③活動記録

活動終了後、活動内容と期間をデータベースおよび「国際交流ボランティア手帳」に記載する。データベースに残すことにより、一人一人の登録者の活動歴を明らかにすることができ、人員確保の時の貴重な判断材料となる。また、手帳は所有を希望する登録者に対して作成し、活動責任者である留学生センター教官が署名・捺印をし、ボランティア活動を行ったことを正式に証明するためのものである。これは、昨今、ボランティア活動等社会に対する貢献が求められており、活動者本人が学生時代の活動の記録として将来何らかの活用ができることを意識している。

４.「国際交流ボランティア」の活動（1998.６～2000.10）

過去、２年あまりにわたって実際に行われた主要な活動に関して、その現状を概観する。

①ボランティアチューター

日本語研修コースおよび日本語・日本文化研修プログラムに属する留学生には、いわゆる謝金チューターがつかない。しかしながら、両者ともに来日経験、留学経験などを持たない場合が多く、日本の生活に慣れるのは大変である。来日直後の学内外の煩雑な諸手続きだけをとってみても、日本人の手助けがなければ困難である。また、日本語研修コースに属する6か月間というのは、大学でも寮でも日本人と接する機会はほとんど望めない。さまざまな情報源として、あるいは心の拠り所として、同じ学生の立場である日本人の知り合いがいることは非常に役に立つことである。日本語でのコミュニケーションが可能である日本語・日本文化研修プログラムの留学生であっても、1年間のプログラムの前半は日本語・日本事情の授業を選択することが研修の中心であり、日本人学生との交流の機会は限られている。

そこで、留学生センターでは、この二つのコースの留学生達が日本での学生生活をスムーズにかつ有意義にすごせるよう、留学生との交流に興味を持つ学生達に無償のチューターになってもらうことにした。日本語研修コースのボランティアチューター制度は「国際交流ボランティア」発足以前から実施されていたが、ボランティア制度発足を機に、「国際交流ボランティア」の活動内容に移管し、同時にチューターの対象を日本語・日本文化研修プログラムまで拡大した。

2000年10月を例にとると、日本語研修コース留学生19名に対して13名、日本語・日本文化研修プログラム留学生14名に対しては11名のボランティア学生がボランティアチューターとして活躍している。過去2年半の間には、応募者が留学生数を越えるということもあったが、今回は応募者数が少なく、2人の留学生を担当するボランティア学生が数名いる。

ボランティア学生は、チューター応募時に、いずれのコースの留学生を希望するかを答えることになっている。その希望をなるべく尊重した上で、留学生とボランティア学生の個々の組み合わせを行う。日本語研修コース留学生についてはオリエンテーション時、ボランティア学生の話し合いによって担当を決定し、日本語・日本文化プログラム留学生については、担当者（教官）が学生の専門、年齢、性別などを考慮の上、決定する。

留学生の来日が近づいたころ、コース毎にオリエンテーションを行うが、このオリエンテーションではボランティアチューターの役割、具体的な仕事内容を紹介し、活動を長続きさせる上での注意事項等に触れる。ボランティアチューター経験の蓄積等をもとにして、ボランティア学生が全面的に協力して作成した『学生チューターハンドブック』(2000)も配布し、参考にするよう促している。

②会話パートナー

主に広島大学短期交換留学プログラム（以下、HUSA プログラムとする。）によって1学期または2学期間、広島大学で学ぶ外国人留学生とボランティア学生とがお互いに言葉

を教えあう制度である。HUSA プログラムの留学生は日本での滞在期間が短いが、その間に授業単位を着実に獲得していく必要がある。短期交換留学プログラムでは日本語の習得を主な留学目的として掲げてはいないが、できれば日本語も覚えたい、日本人の友達を作りたいという希望を持っている学生は多い。HUSA プログラムの学生のほとんどは、留学生センター等で開講されている日本語・日本事情の授業を受講する。授業以外の場でも、日本語を使用する機会を確保しつつ、日本人と確実に交流する手段として会話パートナー制度は有効なものである。英語をはじめとした様々な外国語の会話能力向上を目指す日本人学生にとっても有効であることは言うまでもない。

2000年10月からの HUSA プログラム留学生のうち、会話パートナーを希望した者は35名であった。対して、日本人側の希望者は58名であり、日本人学生数が留学生数を上回ることとなった。留学生には、自分の教えることのできる言語、相手に対する希望（専門、年齢、性別等）を述べてもらい、日本人学生には希望する言語、相手に対する希望を述べてもらった。なるべくそれぞれの希望がかなうような組み合わせを行ったが、日本人学生の方が応募者が多かったということもあり、20数名の日本人学生には待機してもらうこととなった。その後、パートナー同士の都合があわない等の理由で、待機者の中から９名の学生に参加してもらうことができた。

③各種行事の企画運営

留学生センターが主催するオリエンテーションバスツアー、スポーツ大会（ソフトバレーボール大会）、インターナショナルティータイム[1]の企画運営に加わってもらい、参加する学生にとって、これらの行事がより身近で有用なものとなることを目指した。また、国際交流ボランティアの発足した1998年より、学長主催の留学生懇親会（800～900人規模）のアトラクション部分の企画運営を任せた。学生が主体となってアトラクション部分を考えるようになった結果、参加者全員で楽しめるゲームの取り入れ、歌や踊りの出演者を留学生全体に広く募集することなどが可能となった。年々内容が豊かになり、懇親会全体の中でアトラクションの占める割合は大きくなる一方である。

1999年と2000年それぞれの留学生懇親会の特徴として挙げられるのは、各国の伝統的な歌や踊り以外に、様々な国籍や文化背景を持つ留学生達が一つのグループとなって踊りや歌を披露するケースが出てきたということである。国別にではなく、国や文化を越えて一つのものを作り上げるというのは、留学生交流、国際交流を推進する上で非常に大切なことである。国や文化の違いを尊重しつつ、どの国や文化にも帰属しないものを留学生自らが創造する機会を持たせることができたのは、ボランティア学生が早期から出演者募集の広報活動をポスター等を使用して全学的に行った結果であると思われる。

留学生懇親会はほぼ１か月の準備期間を要し、ボランティア学生にとってはかなりの負担になる行事である。準備開始から懇親会当日に至るまで、留学生との連絡調整やゲームの景品集めのために奔走する上、直前までリハーサルと最終調整に追われ、楽しい行事で

ある反面かなりの緊張感を乗り越えなくてはならないものである。そして、懇親会当日は食事やアトラクションを楽しむ余裕もないのだが、ボランティア学生達はそれぞれこの活動に何らかの意義を見い出しながら継続して協力してくれている。

④ボランティア学生の自主企画―広島大学留学生スピーチコンテスト―

1999年6月、ボランティア学生が自主的に広島大学留学生スピーチコンテストを企画し、開催した。ボランティア学生によって提案され、留学生センターによる承認を得て、「留学生センター主催第一回広島大学留学生スピーチコンテスト」が実施されることとなった。これは、ボランティアの学生達がそれまでのスポーツやパーティーでの交流を経て、それ以外の方法でも留学生達の声を公的な場で聞く機会を持ちたいということから企画されたものである。

外国人のスピーチコンテストは各地で行われているが、学生が主体となって実施するスピーチコンテストとしての独自性を持たせたかったためいくつかの工夫がなされた。まず、日本語能力にとらわれず、より多くの留学生に発表の場を提供したかったことから、たとえ日本語の学習歴が短くても応募できるよう、日本語指導をしてくれるアシスタントをつけられるようにした。日本語に自信のない留学生にはボランティア学生がアシスタントとなって、手助けをしたのである。もちろん、アシスタントが留学生の代わりに原稿を書くというようなことになるのは問題であるため、アシスタント間で話し合いをし、どこまで手助けをするのか調整をした。このアシスタント制度のもう一つの目的は、留学生とボランティア学生の交流の機会をなるべく多く持ちたいということである。行事を催す場合、日本人学生が準備をし、留学生と日本人学生が交流できるのは当日のみという事態に陥ることがある。これを避けるために、留学生がコンテストに応募した段階から、日本人学生と留学生とが密な交流ができるようにした。

スピーチコンテストの司会進行は、日本語と英語の2か国語で行われた。これは日本語に自信のない留学生もスピーチコンテストの進行状況がわかり、聴衆が参加する部分でも司会者の指示が十分に理解できることを目的とした。もちろん、英語が外国人留学生にとっての第一言語である可能性は低いが、かなりの留学生にとって理解しやすい言語であるということは期待できる。

また、聴衆参加型のコンテストを目指して、聴衆全体が審査に参加できるように来場者全員に審査用紙を配布した。従来のコンテストにあるような1位、2位といった優劣の付け方をするのではなく、「内容の部」「表現の部」「感動の部」など五つの部門を設け、それぞれの部門毎に優秀賞を授与した。これは、先に述べたように、いわゆる日本語能力以外の側面での評価が可能になるようにしたかったためである。

そして、特別審査員の6名が別室で審査の話し合いをしている時間も来場者の交流の機会として生かせるよう、コンテスト会場では発表者の国や文化にまつわるクイズ大会を行った。このクイズの問題は発表者自身から予め提出してもらっていたものである。

ポスター等を作成して、広報活動を行ったことは言うまでもないが、この行事においては地域の方々にも聴衆として参加してもらえるよう、JRの駅、公共施設、店舗等にもポスターの掲示を依頼した。地域のフリーペーパーの催事情報の中に紹介してもらうこともでき、また、ケーブルテレビや複数の新聞社が取材をし、地域に広く紹介をしてくれる結果となった。また、地域の商店等から賞品の提供を受けることができた。国際交流ボランティアが地域とのつながりを初めて持ち、国際交流ボランティアの存在を学外にも知らせる活動となった。

⑤ホームページの作成

ボランティア制度の発足した1998年度の終わりに、ボランティア学生3名が広島大学国際交流ボランティアのホームページ（http:/home.hiroshima-u.ac.jp/intvol）を作成した。ボランティア制度については、留学生センターのホームページに概要が紹介されているが、それとは別にボランティア登録者自身が実際の活動報告やボランティアの意見感想等を詳しく載せるページを作成したのである。一年間の大まかなスケジュールを載せ、写真を多く取り入れて、ボランティア登録することを検討している学生にとって必要な情報が得られるよう工夫されている。

現在は、ボランティア学生2名が維持管理を行っている。

⑥『学生チューターハンドブック』の編集

広島大学留学生センターでは、広島大学留学生教育連絡協議会と共に、『学生チューターQ＆A』（1997）を作成し、留学生のチューターのためのハンドブックとして2000年前期まで活用した。国際交流ボランティア制度が軌道に乗り、ボランティアチューターとして継続して活動した者の経験を生かし、同時にハンドブックをより読みやすくするために、ボランティアチューター経験者2名を編集協力者として『学生チューターハンドブック』を作成した。

チューターの仕事の流れを示したことや、チューター経験者の感想やアドバイスを集約したことなど、特徴あるハンドブックが作成できた。

以上が国際交流ボランティアが行った主な活動であるが、これ以外に単発的に行われたものとして、病院通院時の通訳、日本語チューター、専門における手助け（用語解説など）、寄贈品配布会運営などがある。

5．国際交流ボランティアセミナーの実施

学生のボランティア活動を適切に育成していくことを目的に、過去3回、以下のように国際交流ボランティアセミナーを実施した。

回	年　月　日	内　　容
1	1998年12月12日	「世界に目を開こうー国際交流ボランティアについて考えるー」 1．講演：ボランティアって何だっけ？ー国際交流の創造はあなたの想像からー 講師：菅井直也氏（鈴峯女子短期大学助教授ー当時ー） 2．パネルディスカッション：留学経験から学ぶ パネラー：アメリカ、ドイツ、中国に留学経験のある本学日本人学生（ボランティア登録者）３名と韓国からの留学生１名
2	1999年２月26日	「異文化適応と文化交流について考える」 1．講演：異文化間普及におけるメディアやリーダーの役割 講師：白水繁彦氏（武蔵大学教授） 2．実践報告：国際交流基金日本語国際センターと津田塾大学における実践報告ー日本語教育におけるネットワークの可能性を考えるー 講師：八田直美氏（国際交流基金日本語国際センター） 3．活動報告会：1998年度に活動をしたボランティア学生のうち、代表10名が活動報告を行った。 4．コメント：石田孝子氏（群馬大学教育学部講師ー当時ー） 田崎敦子氏（東京農工大学留学生センター講師ー当時ー）
3	2000年３月22日	「国際交流ボランティアセミナー」 1．講演：国際交流ボランティアのビリーフ ー論理療法的な考え方ー 講師：林　伸一氏（山口大学人文学部教授） 2．活動報告：1999年度に活動をしたボランティア学生のうち、代表７名が活動報告を行った。

7．「広島大学国際交流ボランティア」組織および活動がもたらしたもの

このボランティア制度は未だ試行錯誤の段階ではあるが、２年半という時間を経て、以下のような役割を果たした。

まず、留学生支援や大学の国際化に寄与する人材が育ってきたということである。例えば、留学生センターでのボランティアチューターを経験後、各学部・研究科のいわゆる謝金チューターの職を任される学生が年々増えてきている。留学生の指導教官が身近な学生がボランティアチューターをしていることを知り、その学生に謝金チューターを依頼する場合、学部の留学生担当係が留学生センターに直接依頼をする場合とがあるが、いずれも、ボランティアチューターの存在が認知され、同時にこの制度が信頼を得つつあることの表れであると言えよう。また、2000年度にはボランティア登録者の中から経験豊かな学生を

HUSA プログラムの英語による授業に通訳として派遣するという機会も得た。派遣した2名はボランティアチューターや会話パートナーの経験を着実に積んでいた学生である。

次に、留学準備の促進という側面が挙げられる。HUSA プログラムについて問い合わせに来る日本人学生に対し、プログラム担当者がボランティア制度、特に会話パートナー制度の活用を奨励してくれたおかげで、国際交流ボランティア登録者が増え、会話パートナーやボランティアチューターとして活躍してくれる学生となってくれた。特に留学を目標に、継続的に会話パートナーとして活動した日本人学生の内何人かが、制度の発足した年以降、毎年 HUSA プログラムでの留学を果たしている。

最後に学生の内面的な変化が挙げられる。先述したホームページの中には、ボランティア学生が実際に活動をして感じたことが紹介されている。

> ～(略)日本へ来たばかりの留学生に外国人登録だの健康保険だのと説明していくうちに、「なんでこんな制度になってんだろう」、と早くも自分の国のあり方みたいなものを考えさせられることになります。(後略)　　－文学部4年－

日本人の学生として普通に生活している場合、外国人登録というものの存在、国民健康保険のシステム、アパート賃貸契約の保証人を外国人留学生が探すことの困難さ、等について考えるという機会はあまりないのではなかろうか。しかし、留学生のチューターとして、そういったものの手続きに一つ一つ触れ、説明まで求められることによって、日本人学生はそれらのシステムや状況の十分な把握が必要となるのである。また、次のような「ことば」に関しての記述も見られる。

> ～(略)それでも彼女と付き合うようになって、伝えたいことがあったら文法事項などは気にせずどんどん話していくこと、口に出して伝えようとすることが大切なんだということに気が付きました。～（略）～英語は「勉強」ではなく、コミュニケーションの手段としての「言葉」だと考えるようになったことは大きな変化だと思います。(後略)　　－教育学部2年－

言語教師が学習者に伝えようと努力してもなかなか伝わらないことを、この学生は経験を通して学んだのである。

8．現在の問題点とその改善策

ボランティア登録者に関する問題、外国人留学生に関する問題、そして組織運営方法に関する問題、の三つの側面について考える。

①ボランティア登録者に関して

まず、登録者の男女比の問題が挙げられる。2000年5月1日現在[2]、広島大学の学生数

は17,342名であり、そのうち、男性は11,134名（64%）、女性は6,208名（36%）である。しかしながら、登録者[3]は男性51名（24%）、女性159名（76%）となっており、圧倒的に女性が多い。対する留学生は男性413名（57%）、女性310名（43名）であり、広島大学全体の学生数における男女比に比べれば、男女の差が少なくなっているが、依然として男性のほうが多い。

ボランティアチューターや会話パートナーは、基本的には一対一の活動である。お互いに遠慮や誤解などのない、長続きする人間関係を築こうとすれば、異性間の組み合わせより同性間の組み合わせのほうがよいと判断し、なるべく同性の組み合わせとなるよう努力している。ところが、男性の登録者が非常に少ないため、やむをえず男女の組み合わせとなってしまうこともあり、結果、交流があまり長続きしないということが起こっている。男性登録者が少ない原因を知り、男性が増えるような募集方法を考える必要がある。

次に、登録者の「英語」に対する意識の問題がある。広島大学の留学生723名のうち、アメリカ、イギリスなどから来る「英語圏の人」はわずか34名（５%弱）である。にもかかわらず、チューターや会話パートナーの応募時、「英語圏の人」を希望する学生が多い。これは、英語圏からの留学生が少ないという事実を知らないということだけではなく、留学生と交流するなら英語圏の人がいい、といった偏見とも思えるような考え方、または英語の上達のためには英語母語話者がいいといった先入観のようなものがあるからではないかと思われる。もしこのボランティア組織が、登録者の「こういう人と交流したい」という要望だけに応える組織だとしたら、「ボランティア」や「国際交流」といった名前を冠する必要はなく、単なる斡旋組織、派遣組織となる。そうならないためには、国際交流ボランティアセミナーや様々な交流活動を通じて、登録者の意識を改革していく必要があろう。

②外国人留学生に関して

ボランティアチューターに外国人留学生（日本語研修生など）が最初に出会うのは、駅の出迎えの場面である。目的の駅に到着したとは言え、何をするべきなのか、何が起こるのかが全くわからない状態なのだが、ボランティアチューターの手助けによって、それからの数日間、必要な手続きをしながら大学内外の様子を少しずつ知ることとなる。また、住居探しの必要な留学生の場合は、ボランティアチューターが予め適当な物件を探しておき、到着後すぐに下見に同行する。このように、来日直後の留学生の生活はボランティアチューターの存在なしには成り立たない状況である。

しかし、この両者の関係がその後も継続的に保たれるとは限らない。外国人留学生から「私のチューターは英語ができない。役に立たない。英語ができないならチューターになるべきではない。」という意見が聞かれたり、ボランティアチューターからは「頼られすぎて困る。自分でできるんじゃないかと思うようなことまで頼んでくる。」という不満が出てきたりする。一方、「チューターは忙しそうだから、こちらからは頼みにくい。」とも

らす外国人留学生もいる。

ボランティアであるということから日本人学生が仕事に対して甘えがあったり無責任であったりしてはいけないし、善意でやっいるのだからという理由で留学生に対して感謝を要求することはできない。しかし、外国人留学生の側も同じ学生の立場でありながら少しでも手助けしようとしているボランティア学生の様子を見守る姿勢も持ってほしいものである。また、逆に遠慮がちな留学生に対しては、ボランティア学生が気を配る必要があるのは言うまでもない。こういったことは、ボランティアチューターと外国人留学生の両者に対するオリエンテーションなどで指導する必要があろう。

③組織運営方法に関して

このボランティア組織の運営方法の中で、重要な位置を占めているものに登録者のデータベースの管理とメーリングリスト（以下、ＭＬとする）の管理がある。200名以上に昇る登録者のデータを管理し、活動の記録を逐次入力していくことはかなりの労力である。ＭＬの管理も同様であり、今後、こういった事務的作業を誰がどのように行うのかを検討し、可能であれば省力化する必要があろう。

ＭＬを立ち上げ、e-mail による情報提供がスムーズにいくようになった反面、改善すべき点も多い。まず、登録者に対するＭＬの使用方法についての理解を促すことである。大学に入って初めて e-mail を使うようになったという学生も多いため、ＭＬを十分には使いこなせていない。例えば、登録学生からＭＬへ向けての発信があったのは、ＭＬができてからまだわずか８回程度である。ＭＬがどういうものであるのか、どういった使い方ができるのかを、ボランティア登録時にきちんと紹介し、有効利用を促したい。

また、多くの学生への情報提供や連絡をするためには、e-mail は非常に有効な手段であるが、同時に気をつけなくてはならない点もある。それは、文字に頼った情報交換が先行してしまうということである。発足当初は登録者も少なく、登録時に面接の時間をとってオリエンテーションをしたり、活動の依頼をする場合も電話を使用したりすることが可能であった。登録者と運営担当者（留学生センター教官）が直接話をしてお互いを知り、関係を築く機会が持てたのである。しかし、登録者の増加に伴って、連絡を e-mail に頼る傾向が強まり、直接、対話をする機会が減ってしまった。ボランティア学生に留学生との人間的な関係作りを求める以上、その仲介役となる運営担当者もボランティア学生のことを把握し、信頼関係を築く必要がある。そのためには、e-mail の有効利用を進めながらも e-mail 利用のマイナス面を補う何らかの方策を講じていくべきであろう。

登録者数の拡大とともに、登録者間の関係も希薄になってきているようである。登録者数が少ない時期は、同じメンバーが重複して複数の活動を行う場合が多く、登録者間の密な交流がなされていた。互いに問題を話し合ったり、協力しあったりすることがスムーズにできたようである。しかし、200名以上の登録者がいる場合は、少ない人員で活動していたころよりも、互いの交流の機会は限られてしまう。どんな登録者がいるのか、他の登

録者はどのような活動をしているのか等、よくわからないまま自分自身の活動が終了してしまうという場合も多い。先述したように、ＭＬはまだまだ使いこなされてはおらず、気楽に意見や感想を述べあうような雰囲気は醸成されていない。ＭＬの利用促進を図ること、「国際交流ボランティアセミナー」を充実させて、登録者が一堂に会して情報交換をする機会を持たせること、そして、日々の交流や作業などができるための場所[4]を設けることが望まれる。

9．おわりに

留学生センターが主導して設立運営した学生ボランティア組織である「広島大学国際交流ボランティア」について概観した。発足後２年半が経過し、組織の定着が進んできたが、前節に述べたように、改善すべき点は多い。外国人留学生の増加とともに、学内外での国際化が一層進む過程で、この組織の重要性は高まっていくと思われる。「広島大学国際交流ボランティア」が今後学内でどのように位置付けられ、どんな役割を果たしていくのか、登録者、外国人留学生、そして運営担当者の三者が互いに意見交換を行いながら、組織の維持発展がなされることが期待される。

〈注〉

1　玉岡（1999a）を参照されたい。

2　この節での学生数等は全て2000年５月１日現在のものである。

3　発足時から2000年５月１日までの登録者すべてを指す。卒業や修了で、広島大学の学籍を失うと同時に、本来は登録資格を失う。卒業等をする学生はその旨、データベース管理者に連絡するよう呼びかけてはいるが、徹底できないのが現状である。登録者からの自己申告以外、卒業等の情報を把握する手段を持っていないため、登録者数には卒業した者も含まれている。

4　ボランティア登録者が活動のための話し合いなどができるよう、留学生センターの教室を使用できるようにはしてあるが、使用時間が限られていることや教室としての使用が優先され、ボランティア活動に関わる物品を設置することができないことなどの問題がある。

〈引用文献〉

玉岡賀津雄（1999a）「留学生指導部門：『対処』型の支援活動から『予防』型の交流活動への転換」『広島大学留学生教育』３号，pp.112-121.

玉岡賀津雄（1999b）「国際交流ボランティア制度の導入による留学生の指導・助言活動の新しい展開」『1998年度広島大学留学生センター講演・討論会報告書「二十一世紀の留学生教育に向けて」』pp.29-37.

広島大学留学生センター（2000）『学生チューターハンドブック』